

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 優秀賞 受賞作品

『空を見上げて』

東京都

千代田区立九段中等教育学校

二年 田中 結翔

空を見上げて

千代田区立九段中等教育学校 二年

田中 結翔（たなか ゆいと）

ふと立ち止まって自分の人生を振り返ってみると、平々凡々なものだと思える。変わった所に住んでいる訳でもなく、人間関係もそれなりに楽しく過ごしてこられたのだと思う。ただ、そんな個性のない幸せな生活を送っているからこそ、「自分」が分からなくなってしまうみたいだ。例えば自己紹介の際に特技や自らを表す言葉を聞かれたら

「特にないかな」

と曖昧な返事をしてその場を切り抜けた。本当の自分はどのような個性を持っているのか、どうすれば平凡な自分から抜け出せるかなどの自問自答を繰り返しても納得のいく答えは見つからなかった。

あれは約三年前、炎天下に蝉時雨が降り注ぐ酷く暑い夏の日だった。夏休みも終盤に差し掛かり、周りの友達が宿題を終わらせて遊んでいる中、僕はたった一つの宿題に数週間も頭を悩ませていた。それは一番簡単な宿題「自己紹介シート」。自分を物に例えるという項目だけが埋まらず、インターネットを使って就活で役立つ長所なんてものを見ていた。どれも当てはまらない縦に揃って並ぶ文字列を見ると、視界が歪んで頭が真っ白になる。耐えきれず僕は逃げるように外へ出た。

「よっすー!」

家から出て数歩右に進むと、後ろから聞き馴染みのある声が耳に入った。この友達は僕よりも年下で、そのくせに生意気な口を聞いてくる面白い奴だ。彼の明るさに助けられるような気がして僕は後ろを振り返った。すると、驚くことに彼は滅多にしない何か悩みを抱えているような暗い表情をしていた。

「ま、とりあえずいつもの場所行きますか」

表情について真っ先に触れたい気持ちもあったが、どこか深刻そうな気がして敢えて触れずに彼の手を引いた。僕と彼がゲームを持ち寄って遊んでいる公園に向かった。楽観的な考え方の友達だったから、どうせ公園に着くころには機嫌を直してくれるだろうなんて思いながら。しかし、彼は到着してからもいつもの調子を取り戻さず、当たり前障りのない返事ばかりを口の先から小さく発するだけだった。

「何かあったなら言ってくれよ!」

僕は彼のことを元気づけられる自信がなかったが、気づけばこのような言葉を投げかけていた。顔を上げてみると彼の目じりに涙が溜まっていて、自分が泣かせてしまったのかと慌てた。

「親と喧嘩をしたんだ。ちょっとした言い間違えから発展しちゃって!」

彼は泣きそうな声でゆっくりと語ってくれた。親に暴言を吐いて逃げるように家を飛び出したときに僕の背中を見て、声をかけたそっだ。正直、喧嘩の内容はそこまで重大なものではなく、一言ごめんなさいと言えば済みそうなものだった。この時の彼は小三だったから、物事を大きく捉えてしまったのだろう。僕は彼が泣き止むまで背中をさすることしかできなかった。やっぱり彼のためになるような言葉は言えなかった。

「なんかごめん! 急に泣いちゃって!」

彼は照れを隠したいのか笑いながら言った。落ち着いていつもの元気さを取り戻した姿を見て胸を撫でおろす。この時、僕は「自己紹介シート」のことを思い出した。提出期限が明日までだから急いで完成させなければいけないのだ。結局、自分を何に例えるのかは決まっていなかった。

「なあ、俺って何かに例えるならな」

僕は思い切って彼に聞くことにした。そういえば、自問自答はしていたが他人から評価はされたことがなかった。小三だから語彙が豊富ではないが、ヒントにはなるだろうという淡い期待だ。彼は周りを見渡して例えられそうなものを探し始めた。すると、僕の顔と空を交互に見つめて元気いっぱいに言い放った。

「お前は雲だな！　なんかいつでも傍にいますといつかさ。人が落ち込んでいるときは共感するところとか」

心がドキリと動いたような気がした。僕は彼の意見を聞くや否や、話を切り上げて足早に公園を去った。心から満ち溢れる感動がさらに僕の足を速めていたような気がする。家に帰って早々机に向かい、ずさんに置かれた「自己紹介シート」の空欄に筆を走らせた。

『僕は雲のような人間だ。人が落ち込んでいる時には雨を降らせるように共感する。その雨によって救われる人々もいる。そして、いつでも傍にいて、その人の心の支えになりたいと願っている』

自分で書いていると小恥ずかしい気分になったのを覚えている。それから僕のキャッチコピーは「雲のような人」だと決めている。空を見渡せばいつでも見える。傍にいてくれるような存在。悲しい時には雨を降らせて一緒に悲しんでくれるような存在。雨が降ると豊かな作物ができる、晴れやかな気分させるような存在。僕の人生を明るくした彼への敬意も込めて、この作文にて堂々と示す。僕は「雲のような人」で、これが僕のキャッチコピー。

今日は天気が良い。だからこそ、良い。僕は左手側の窓から空を見上げた。